内　科

副院長　北　和彦　　診療局長　斎藤 博文

統括部長　　行木 瑞雄

１．平成 29 年度の目標

内科総合力のアップ：各部門の連携・協力体制を強化し総合力をアップする。

人材育成：初期研修医に充実した研修環境を提供する。新専門制度に向けて後期研修医確保の体制を整える。

２．診療体制

外来診療は内科新患、消化器、循環器は月曜から金曜まで週 5 日、糖尿病は火水木の 3 日、内分泌は火の 1 日、神経内科は水の 1 日診療を行った。呼吸器は月火水金の 4 日であったが、9 月に石崎医師の退職に伴い月水の 2 日に縮小となった。入院診療と日当直は常勤スタッフ 15 名で分担した。日当直では千葉市夜間内科系救急 2 次当直を月 4 回程度、ならびに休日 2 次日直を月 1 回担当した。

３．スタッフ

副院長	北　和彦	（消化器）
診療局長	斎藤　博文	（消化器）
内科統括部長	行木　瑞雄	（循環器）
消化器内科統括部長	野本　裕正	（消化器）
循環器内科統括部長	宮原　啓史	（循環器）
部長	長谷川　敦史	（循環器）
部長	太和田　勝之	（消化器）
部長	間山　貴文	（内分泌）
主任医長	石崎　俊介	（呼吸器）
医長	薄井　正俊	（消化器）
医長	堀江　佐和子	（循環器）
医長	渡邊　周之	（糖尿病）
医師	田澤　真一	（消化器）
医師	北川　真理	（循環器）
医師	大野　力	（消化器）

平成 29 年 3 月に高平医師が退職したが、4 月より北川医師と大野医師が加わり常勤医 15 名となったが、9 月に石崎医師が退職となった。

４．診療実績

年間の新規入院数は 1855 名（月平均 154 名）であった。部門別では消化器内科 1093 名（同 91 名）、循環器内科 493 名（同 41 名）、内科（呼吸器・内分泌・糖尿病）269 名（同 22 名）であった。

① 内視鏡統計

		平成 29 年度	平成 28 年度
上部消化管内視鏡		1705	1624
	ポリペク/EMR	14	4
	ESD	34	36
	EVL/EIS	9	9
	止血術	48	44
	PEG	12	10
下部消化管内視鏡		1395	1202
	ポリペク/EMR	455	363
	ESD	7	9
胆膵内視鏡			
	ERCP	303	302
	(EST)	80	67
	EUS	78	93
	(FNA 関連)	5	5
気管支鏡		0	0
合計		4145	3768

② カテーテル統計

		平成 29 年度	平成 28 年度
心臓			
	CAG	296	238
	PCI	105	115
末梢血管			
	PTA	7	2
	IVC フィルター	2	1
腹部			
	TACE	15	15

③ 手術統計

		平成 29 年度	平成 28 年度
ペースメーカー手術			
	新規植込み術	31	24
	交換術	14	17
植え込み型心電モニタ		0	4

５．平成 29 年度の総括

内科全体で毎朝ミーティングを行い、救急患者や重症患者について申し送りをするようにした。また初期研修充実のため週 1 回内科合同カンファレンスを行った。

消化器内科は、前年度からの北、斎藤、野本、太和田、薄井、田澤の 6 名に大野が加わり計 7 名で診療を行った。全員で毎朝病棟を回診し週 2 回の早朝カンファレンスを行ない患者の検査や治療方針などを話し合った。肝臓領域では C 型肝炎に対する DAAs（直接作用型抗ウイルス薬）や B 型肝炎に対する核酸アナログを積極的に行うとともに、肝細胞癌に対する経皮的ラジオ波焼灼療法や肝動脈化学塞栓療法も引き続き同様に行ったが、一時期と比べ症例は減少傾向である。消化管領域では、とくに下部消化管検査件数は増えた。上部・下部の ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）が年間 40 例強を維持するとともに大腸ポリープに対する内視鏡治療は年間 400 例以上とこの数年間症例数が漸増している。また、胆膵領域でも ERCP 関連手技、EUS（超音波内視鏡）関連手技のいずれの手技においても対象症例数の増加が続いている。

循環器内科は、前年度からの行木、宮原、長谷川、堀江の 4 名に北川が加わり計 4 名で診療を行った。全員で毎朝病棟を回診し、週 2 回早朝に心カテの読影カンファレンスを行った。PCI は年間 100 例を維持し、PTA とペースメーカー手術は昨年よりやや増加することが出来た。

糖尿病代謝内分泌内科は前年度と同様に間山と渡邊の 2 名で診療にあたり、外来紹介患者数も増加傾向となった。また千葉大からの非常勤医師による妊娠糖尿病外来も行って頂き、周産期診療にも貢献することが出来るようになった。

呼吸器内科は石崎が 9 月に退職され常勤医が不在となり、入院診療を制限し外来診療も縮小となった。

６．今後の目標

引き続き内科総合力と人材育成の強化に努め、地域医療に貢献できるよう進めたいと思います。